

大阪鉄道病院・取り組みのご紹介

マンパワー強化でご期待に応える地域医療連携室

昨年4月、業務・サービスの充実強化を目指し、1階に拡大移設を果たした地域医療連携室。組織再編により診療部・看護部・MSW・事務部の構成となりスタッフも増員、ますますニーズの高まる地域医療連携においてより多彩な役割を果たすべく活動しています。

地域医療連携の窓口として、地域の開業医の先生方からご紹介をいただいた患者さんの診療がスムーズに行われますように電話・FAXによる予約受付等を円滑に執り行っております。また紹介していただいた患者さんの受診など近況報告書をご紹介元の開業医の先生方へ、迅速にお知らせをしています。

ご紹介患者さんの予約や連携に関するご意見・ご相談は地域医療連携室へお願いいたします。

(副室長 東 宏昭)

今年度4月から地域医療連携室に副室長として配属になりました。病棟と外来での師長経験を活かし、多職種と情報共有を図りながら院内連携のキーパーソンになりたいと思っています。

また入退院支援看護師が、入院前から退院に至るまでの患者さんの生活をサポートしています。入退院支援看護師と情報共有を密にし、早期に問題解決し、患者さんがスムーズに退院できるように努めています。

今後は地域包括システムを推進するため、地域医療機関との役割分担を明確にし、質の高い医療が提供できるようさらなる連携強化に尽力できればと思います。コロナ禍ではありますが、顔の見える関係づくりに努め、少しでもご要望にお応えできるようにしたいと思います。

(看護師長 蓮池 純美子)



地域医療連携室にて。並んでそれぞれの業務に励む3人です。
(向かって左より堤、東、蓮池)

昨年11月に入職させていただきました堤です。これまでは、介護福祉士として介護老人保健施設で食事・入浴・排泄介助、ケアマネジャーとして在宅サービスの調整や自立支援のお手伝い、そして社会福祉士として、生活に何らかの困難を要する患者さんの支援や、地域の医療機関さんからの入院・転院調整などにも幅広く携わらせていただきました。急性期医療機関で働くのは初めてですが、これまで培ってきた経験を活かしながら、大阪鉄道病院とともに成長していきたいと思っています。

現在は、当院に関するデータの扱いを主業務としております。データから当院の強みや弱みを把握し、今まで以上に地域の医療機関や住民のみなさんから信頼を得られる体制構築に尽力いたします。まだまだ未熟でふがいない面もあるかと思いますが、地域医療機関と連携を行いつつ、患者さんが安心して受診していただけるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(課員 堤 正規)

“私達は人間性を尊重し、謙虚で誠実な医療を提供します”

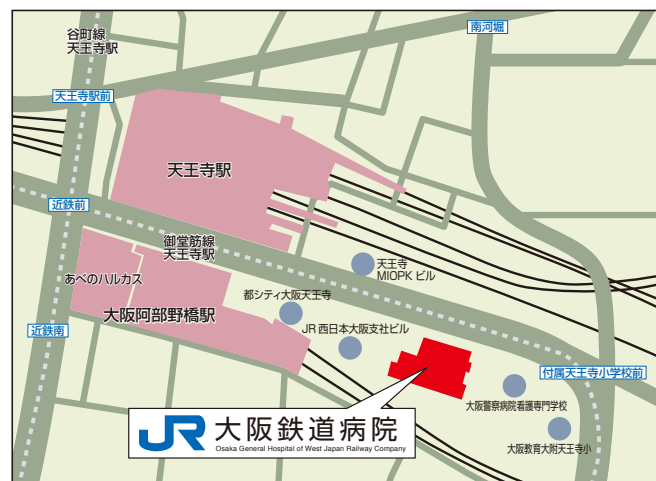
【基本方針】

安全で良質な医療を実践し、信頼される病院を目指します。多機能型急性期病院としてチーム医療を推進し、継続的な医療を提供します。地域に根ざした病院としての役割を認識し、住民の皆さんの健康増進に努めます。地域医療機関との連携を重視し、きめ細かな医療に努めます。専門性を追求し、医療レベルの向上と人材の育成に努めます。

JR 大阪鉄道病院
Osaka General Hospital of West Japan Railway Company

〒545-0053 大阪市阿倍野区松崎町1丁目2-22
TEL.06-6628-2221 (代表) FAX.06-6628-2287 (代表)
地域医療連携室 FAX.06-6628-4707
ホームページ <http://www.jrosakahosp.jp>

受付時間/午前8時30分～午前11時00分 診療開始/午前9時00分～
休日/土日祝・年末年始(12月30日～1月3日)



メディカル
よりよい医療の始発駅

ぽっぽ vol. 5
2021.2



巻頭特集・座談会
「大阪鉄道病院の拓く新たな時代」
院長 上田 祐二
看護部長 西谷内 由美
事務部長 宮本 博之
リハビリコラム
おくすり基礎講座
Radiation Station
サポートに感謝！
地域医療連携室の取り組み

JR 大阪鉄道病院
Osaka General Hospital of West Japan Railway Company

～新型コロナ禍を乗り越え、次なる中期改革計画の推進へ～



座談会 院長 上田 祐二
看護部長 西谷内 由美
事務部長 宮本 博之

2020年度がスタートした4月より、大阪鉄道病院は次なる5年間を見据えた新しい中期改革計画を策定し、動き始めました。

しかしご存知のとおり新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、職員一同がまずは診療体制を維持すべく奔走した日々となりました。

そんな時勢下での1年を院長・看護部長・事務部長それぞれの立場から振り返るとともに、来たる2021年度、中期改革計画2年目以降に向けた思いを語り合いました。

5か年計画の成果をもとに 新たなテーマを策定、始動

上田院長(以下上田) 私の院長着任から5年、職員協働ワンチームで取り組んできた病院改革計画はおかげさまでさまざまな形で実を結び、最終年度の2019年度は大幅な収支改善という成果に繋げることができました。そして2020年度に迎えた第2期目の中期運営計画、改革計画についても、従来の取り組みの継続が重要であり基本であるという視点で、新たに2つのテーマを策定しました。その1つめは「弱みのない診療体制の構築」、そして2つめは「2025年地域医療マネジメントへの中核的関与」ということです。

宮本事務部長(以下宮本) 「弱みのない診療体制の構築」は、院内に向けられたテーマですね。弱みをなくすというスタンスが、今後の地域医療に必要であることを日々実感しています。

2015～2019年度における病院改革テーマ

1. 地域医療連携の組織的強化

成果 2019年末までに近隣5区（阿倍野・東住吉・平野・天王寺・生野）の医師会様と連携登録医制度を締結。

2. 時代を見据えた病院機能の分化と最適化

成果 2017年に緩和ケア内科の新規標榜とともに19床全室個室の緩和ケア病棟を開棟。これにより急性期から回復期、さらには緩和ケアまで切れ目のないがん医療提供体制を構築。

上田 もちろん従来から強みとなっている診療部門を伸ばすことも大事ですが、地域に求められる医療をバランスよく担っていくためには、弱みのない普遍的な診療体制を整備していく必要があります。地域のみなさんのご期待に十分お応えしていくためにも、標榜しているすべての診療科、診療部門において、標準以上の医療を提供できる体制を整え、地域と時代に求められる多機能型急性期病院の理想形を継続的に追求していきたいと思います。そのための具体的な取り組みもスタートしていますね。

西谷内看護部長(以下西谷内) 看護部では診療体制を支え弱みのない組織をつくる手段として、病棟・外来・手術室間での応援体制の確立や人事異動を行ってきた

ことで、職員同士のサポート体制が根づいてきたように思います。ひとつの部署や病棟に特化すると、専門的に深化しても、そこが万が一何らかのダメージを受けたときに全体へのマイナス影響が免れません。遺伝子組み替えで強い種に改良するように、人事交流は強い組織をつくり、風通しをよくする上で、重要なことだと考えています。

宮本 事務部では、前の5か年計画推進中より病院の健全経営という目標のもと、全職員を対象とした収支説明会の開催や経営資料の見える化による経営参画意識の醸成を図ってきました。先生方から職員まで強みも弱みも含めた現状を把握し次の一手に役立てていただけるよう、情報をしっかり共有できる体制を整えることが事務の使命のひとつと考えています。診療科別のデータも解析ソフトなどを活用して、よりわかりやすく提供する体制を実現しました。小さなことからコツコツですが、その積み重ねがさらなる意識改革につながることを期待しています。

西谷内 看護部門でも、分析ソフトを駆使しながら戦略を立てる必要性を感じています。ベンチマークをはじめ院外との比較、院内での比較をタイムリーに行い、昨年との違い、先月との違いを知ることで、課題や向かうべき方向性が見えてきます。新たに「データの読める師長、副師長」をひとつの目標に、データを活用しながら部署の強みや課題がタイムリーに見出せるよう、学習し、考える組織づくりをしていきたいと考えています。



事務部長 宮本 博之

院長 上田 祐二

看護部長 西谷内 由美



上田 一方、「2025 年地域医療マネジメントへの中核的関与」は、少しカッコイイ文言ですが、当院が次年度に医療マネジメント学会の大阪支部学術集会を主催させていただけるということもあり、“医療マネジメント”という言葉を前面に出しました。これまでのテーマ「地域医療連携の組織的な強化」の延長線上に設定した、地域視点のテーマです。

宮本 その一步として、地域医療連携室を従来のバックヤードから1階のオープンスペースに集約するとともに、人員を補強し、より充実した活動ができるよう体制を整えたのが昨年度のトピックスですね。

西谷内 地域医療連携室リニューアルにともない担当看護師長が常駐するようになりました。新しい動きのなかで当院にとって、また地域にとってベストの医療連携のあり方を模索している最中です。

上田 それぞれのテーマに基づいた柔軟な対応、たいへん頼もしく思っています。

コロナ禍を乗り越える 専門知識とチーム力

宮本 ただ、今回コロナ禍という予期せぬ事態により受けたダメージは非常に大きいものがあります。現時点ではまだまだその渦中にあるわけですが。母体である JR 西日本グループ自体の経営も悪化し頼ることができないなかで、いかに医療の現場への負担を最小限にとどめ、経費を調整していくか。事務としても知恵と工夫と情報力がますます求められるところです。

上田 病院の管理者としては、リスク・マネジメントが最大の職責であると自覚しています。医療安全の確保や院内感染の防止に努め、患者さんと職員を守っていかねばなりません。その意味でも、感染リスクの高い現場においてがんばってくれているスタッフ、また裏方で支えてくれるスタッフ、すべてに



感謝しています。特に当院の患者さんと職員に二次感染が発生していないのは、ICT（院内感染対策チーム）メンバーの指導のもと、院内感染防止に万全を尽くしている成果であると考えています。

西谷内 クラスター防止対策は、そのときそのときの最善策を講じ臨機応変に対応してきました。対応する看護師たちも「うつるかもしれない、うつすかもしれない、そうってはならない」と気を張り詰め、家族との生活のありようにも変化を余儀なくされながらも高い意識を持ち、患者の一番身近なところで日々の看護にがんばり続けています。特に ICT メンバーはまさに身を粉にして奮闘し、院内ばかりでなく他院の相談にも対応するなど、地域にも貢献しています。少しでも ICT の負荷を軽減し、これからも息長く活躍してもらうためにも、病院全体でサポートできることを相談しながら、一丸となって感染管理対策を継続しています。

上田 人事交流によるフレキシブルな体制づくりが、ここでも効果を発揮していますね。スペシャリストの活躍はもちろん、レベルの高い知識と経験を持ち合わせたゼネラリストの育成は、地域医療にとっても、また今回のようなアクシデントに強い組織をつくっていくためにも必要不可欠なことかもしれません。

宮本 一般企業ではリモートワークが推奨され実践されているところも増えましたが、医療者はもちろん裏方である事務も、やはり現場にいないと仕事にならないのが病院です。私たち職員も毎朝、朝礼で注意をうながして気を引き締め、最大限の注意をはらいながら業務に取り組んでいます。

with コロナの時代に向けて 地域の基幹病院としてすべきこと

上田 地域との連携に関しては、コロナ禍により当院が例年開催してきている多くの病診連携や地域連携の研修会が中止になり、地域の開業医の先生方や医療関係者の皆さんと当院の職員との顔を突き合わせる交流は限られたものになってしまいました。しかし当院と近隣区医師会との連携登録医制度の締結は、地域医療

<当院におけるコロナ対策>

- ・ **入院時の感染対策**…すべての入院患者さんの体温・症状・行動確認を玄関フロアで実施。病棟カウンターの体温・症状確認。
- ・ **職員の感染予防**…職員間の濃厚接触を避けるため、昼食場所の開放と3密対策。会議室等の換気、取手や PC などの共用部分の清掃、職員貸出用の体温計設置。症状がある場合の申し出や就業制限、自己健康管理の徹底。
- ・ **発熱者の感染予防**…外来での発熱者は一般の患者さんとは別の場所で診療を行い、ハイリスク患者さんとの接触を避ける。

連携強化のための必須の取り組みでありますので、いっそう強化推進していきたいですね。

宮本 今後の診療報酬の改定でも、紹介状なし外来受診患者さんの特別負担徴収義務の拡大が示されるなど、地域の開業医の先生方とのますます密な連携が望まれています。そんな大切な時期に、なかなか Face to Face のコミュニケーションがままならないことに、とても歯がゆい思いをしています。しかし直接の意思疎通がどうしても必要と判断したところでは、細心の感染管理のもとで各科の先生とともにこちらから出向くなど、可能な限りの努力をしています。



西谷内 病院の存続によって医療を継続していくことこそが、地域連携に、患者サービスに、適切な医療につながると考えます。すでに起こっている変化だけでなく、今後起こりうる変化に備え、柔軟に適応する組織をつくるには、従来の型にとらわれな



い自由な発想と柔軟な思考、やってみようという気概と挑戦、職員一人ひとりが自分の職責と向き合い、改革の主体となることが重要です。そして時に立ち止まり熟考することが、さらなる工夫につながると思います。

上田 そうですね。医療を通じた地域社会貢献を持続的に実現していくためには、改革の推進と病院単体での経営健全化による時代に即した病院機能の強化が不可欠です。今後もその気持ちを忘れずに、一致団結して取り組んでいきましょう。また、JR西日本グループは、本年度の下期と次年度（2021 年度）をコロナ禍で大きく落ち込んだ経営状況からの「変革・復興期（第1期）」と位置づけています。ワクチンを接種できるようになれば世間の空気は明るくなると思うのですが、だとしてもその効果も不透明ですし、新しい治療薬もどこまで開発が進むかわかりません。ですからコロナの影は次年度もまだまだ尾を引き続けることと思います。よって with コロナは新常态であると考えて、何でもコロナと関連付けてコロナのせいにするのではなく、コロナと共存しながら目標の達成に向けて職員一同力を合わせて反転攻勢をかけていきたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

西谷内・宮本 よろしく願いいたします。

院長 VISION 「2025年を見据えて」

4 年先の 2025 年は、大きな節目の年となります。各都道府県で策定中の地域医療構想は完成の時期を迎えますし、大阪・関西万博が開催されることとなります。そして何より、私たち大阪鉄道病院は創立 110 周年を迎えます。

その節目の 2025 年、記念すべき 2025 年へ向けて、この地域の理想的な連携モデルを実現していくために、当院が今後も継続的に中心的役割を担っていくよう努めたいと心から願います。医療介護連携の強化、そして病病連携や地域の診療所に対する後方支援機能の強化等、取り組むべき課題はまだまだ山積しています。地域医療連携室の機能強化とともに、ひとつひとつの課題に改めて対応していかなばなりません。また、私自身、現在医師会から委嘱されています役職として、大阪府医師会では広報委員会委員と勤務医部会常任委員、そして阿倍野区医師会では理事を務めさせていただいています。今後はこれまでに以上これらの役職のもとで大阪府医師会そして阿倍野区医師会での活動を強化し、地域でリーダーシップを発揮していきたいと考えています。

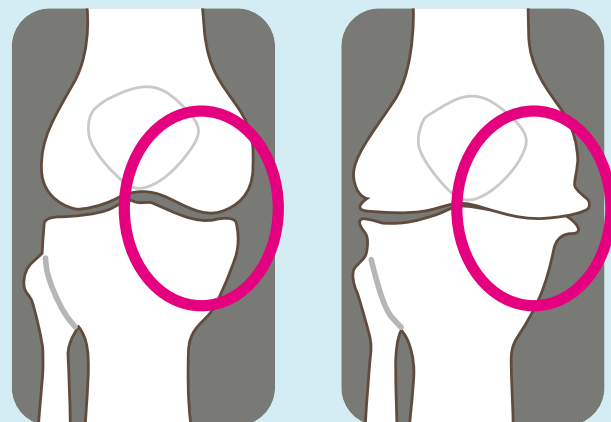
院長 上田 祐一

変形性膝関節症 その1 「変形性膝関節症」とは？

今回より、年齢を重ねた方に多く現れる「変形性膝関節症」について解説させていただきます。

●メカニズム

膝の軟骨が減少して、変形したり骨がこすれたりすることによって痛みなどの症状が出てきます。日本では長期間の膝への負担が原因で、少しずつ軟骨がすり減り変形していく一次性的変形性膝関節症の割合が圧倒的に多いとされています。(他にケガや慢性関節リウマチなど、原因がはっきりとわかる二次性のものもあります)

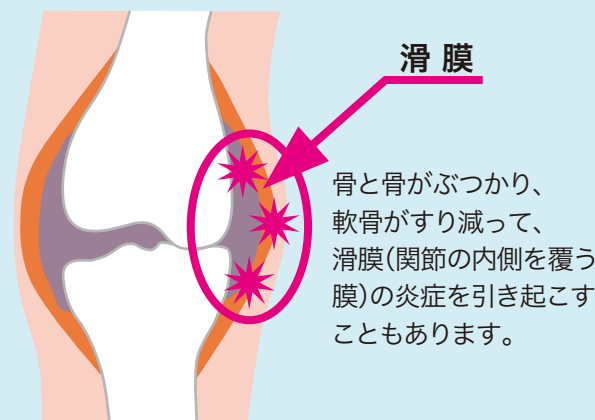


正常

変形性膝関節症

●症状

動かすときのこわばり感や痛み、関節内に水がたまって膝が腫れ重だるくなるなどの症状が現れます。



滑膜

骨と骨がぶつかり、軟骨がすり減って、滑膜(関節の内側を覆う膜)の炎症を引き起こすこともあります。

※症状や感じ方には、個人差があります。

＜次回は変形性膝関節症その2「一般的な医学的治療と理学療法」についてご紹介する予定です＞
※前回予告いたしました「言語療法特集」は諸事情により変更となりました。機会を改めてお届けしますので、ご了承ください。

※当院では外来リハビリテーションは受け付けておりません。

おくすり基礎講座

薬剤部

Lesson1

「くすり」ってなんだ？ 前編
市販の医薬品と病院の医薬品の違い

薬剤部 梅谷 亮介

「一般用医薬品」と病院で処方する「医療用医薬品」には、どんな違いがあるのでしょうか。その特徴をまとめてみました。

●医療用医薬品



医師・薬剤師などの専門家の指導のもと、厳密な管理のもとで使うくすり
・飲み方は人によって異なる(医師の指定した用法・用量を守る、他人に譲ったりしない)
・医療保険が適用される
・入手・使用するには処方箋が必要

●一般用医薬品



薬剤師・登録販売者のアドバイス等のもと、自分の判断で使用するくすり
・医療用医薬品と比較して含有されるくすりの成分や量は安全性が重視されリスクが少ない
・医療保険の適用なし
・処方箋の発行なしで薬局やドラッグストアで購入する

以上のことから、一般用医薬品は次のような場合に使用するのが望ましいといえます。

- ・体調の悪いときの初期治療(風邪など)
- ・原因が明らかな慢性疾患(高脂血症など)
- ・環境衛生の目的(消毒など)

数日間使用して効果が認められない場合は、病院を受診するようにしましょう。

ただし、一般用医薬品でも使用する人の体質や病状によって、注意が必要です。

例) ・「抗ヒスタミン剤」含有の風邪薬は前立腺肥大や緑内障のある人は使用できないケースがある。
・「リゾチーム」含有の風邪薬は卵アレルギーのある人は使用できない。

使用の際は必ず説明書を確認し、不明な点は薬剤師または登録販売者に相談することが重要です。

【大阪鉄道病院・新MRI装置のご紹介】

Philips Ingenia 1.5 テスラ

広い開口径と、より快適な検査環境を実現。

当院放射線科では、2019年4月より新しいMRI装置を稼働いたしました。機器性能の向上はもちろん、検査環境においても患者さんにたいへんご好評をいただいております。今回は、あらためてその特長をご紹介します。

Philips 超電導MRI装置「Ingenia 1.5 テスラ」はここが新しい

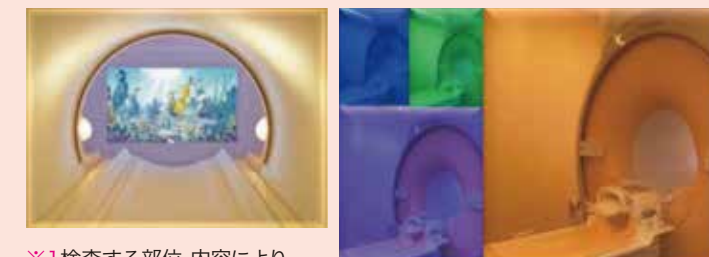
・装置の開口径が60cmから70cmになりました。たった10cmと思われるかもしれませんが、実際に内部に入るとその差は歴然。閉塞感・圧迫感の少ない検査スペースとなりました。



開口径が広くなりました

・「映像・音楽・色」で気持ちをやわらげる演出

従来の検査では、大きな音のなかで検査が終わるのを寝て待つだけでした。新装置では、少しでもリラックスしていただけるよう「映像※1・音楽・色」機能を付加。快適な環境で検査を受けていただけます。



※1 検査する部位、内容により、映像を見ながら検査を受けていただくことができます。

放射線部門では、みなさんにより安心して検査を受けていただけるよう努めております。もしも疑問や不安がございましたら、お気軽にお声がけください。

サポートに感謝！

当院の活動を支える委託スタッフをご紹介します

安心して味わっていただける食事の提供を。

【株式会社 ニチダン】

業務内容

入院患者さんに提供する食事の委託会社。当院栄養室と連携して、栄養管理の行き届いたおいしく安心安全な患者食の献立サポートから調理までを担っていただいています。



店長 泉 若奈さん



活気ある厨房



栄養室



配膳車は7台が稼働中

ニチダンは病院・福祉分野の食事・サービスの業務委託を中心に60年の歴史を重ねてきた企業です。近年では企業給食、学校給食、保育園にまで分野を広げ、「味と真心で社会に奉仕する」を経営理念に、おいしく安全な食事の提供を通じた社会貢献を目指しています。

大阪鉄道病院には、2018年より業務委託いただき現在に至ります。現在は、栄養士、調理士、盛り付けや洗浄担当も含め、朝昼晩、20～30名ほどのスタッフが勤務しています。朝食担当は午前4時には出勤。それから夕食に至るまで、各分野でスムーズなバトンタッチをしつつ稼働している厨房です。

私自身の仕事は、病院の栄養士さんが用意されている献立をもとに調理に落とし込んだり必要に応じてアレンジを加えたりするのが主な業務です。患者さんによってはカロリー制限やアレルギー管理などが必要となり、間違いが許されません。病院の栄養士さんはもちろん、異なる役割を担うスタッフとのコミュニケーションをしっかりと、密な連携のもとで慎重に確認することを大切に考えています。

大阪鉄道病院の食事は、比較的食材が多彩で品数もボリュームもあり、多くの患者さんにご満足いただける内容になっていると思います。なかでもお正月やひな祭りなどの行事食は、大変ご好評いただいています。器も見映えのするお重を用意して下さるので盛り付けの工夫も楽しんでいます。

お一人お一人、お名前の「食札」をつけて配膳しますが、時折戻ってきた食札に「おいしかったです」などメッセージを書いてくださっていることも。患者さんの顔を拝見することはできませんが、そんなお心遣いが嬉しく、やりがいにもつながっています。これからも清潔・安全を第一に、少しでも楽しんでいただけるような食事の提供を目指して、力を合わせてがんばっていききたいと思います。